

主 文
被告人を禁錮2年に処する。
この裁判が確定した日から3年間その刑の執行を猶予する。
訴訟費用は被告人の負担とする。

理 由
(認定犯罪事実)

被告人は、空調機設置工事等の業務に従事していたものであるが、平成11年2月9日午前9時30分ころから午後2時30分ころまでの間、神奈川県綾瀬市（以下省略）海上自衛隊a航空基地内202倉庫の空調機設置工事に際し、同倉庫H室において、同倉庫の内壁に開けられた配管口に通した塩化ビニール製ドレーン管にアセチレンガスバーナーの火炎を噴射させて配管工事を実施するに当たり、同倉庫の内壁には燃焼しやすい木質造作物が設置され、配管用に開けた穴の中には燃焼しやすい木くず等が残存していたものであるから、防火シートで内壁を遮へいし、濡らした布を配管用の穴の口（配管口）に詰め込むなどの措置を講じるなど、前記バーナーの火炎がこれらに燃え移って火災になることを未然に防止すべき業務上の注意義務があるのに、これを怠り、何らの措置をも講じないまま同バーナーの火炎を漫然噴射させたまま配管工事を継続した過失により、同日午後2時30分ころ、同バーナーの火炎を前記配管口周辺の可燃物に引火させてこれを燃え上らせて火を失し、よって、現に前記空調機設置工事に従事していた作業員Dがいる前記倉庫（木造平家建、床面積4303.47平方メートル）1棟を全焼させて焼損した。

(証拠) 省略

(補足説明)

1 弁護人は、被告人の作業と本件火災事故との間の因果関係及び被告人の予見可能性を否定し、被告人には本件注意義務違反がない旨主張し、被告人は、捜査段階においては、その因果関係、注意義務違反をも含め自白していたものの、公判において、これらを否定し弁護人の主張に沿う供述をしているので、以下補足して説明を加える。

2 本件の注意義務について

(1) 関係各証拠によれば、前記基地内202倉庫（以下「本件倉庫」という）は、本件火災当時、倉庫として使用され、常駐する自衛隊員はいなかったこと、本件倉庫北東角区画は、本件火災当時補修工事中で各部屋とも電気器具類や暖房機器などが設置されていない状態であり、その区画H室東側壁（以下「H室東側壁」という）は、化粧合板（厚さ約4ミリメートル）、合板（厚さ約十数ミリメートル）、グラスウール、木摺（横板）、ルーフィング（黒紙）及び外壁トタン（樹脂製の発泡材付き）という構造であり、グラスウールが不燃材に近いほかは燃焼しやすい素材であったこと、被告人は、海上自衛隊から本件倉庫への空調機設置工事を受注したB株式会社の社員C、D他1名とともに平成11年2月8日から本件工事に従事し、同月9日午後2時30分ころ、本件倉庫H室内において、Cが同室東側壁下方の木製土台部分の床から数センチメートルの位置に開けた配管口（直径約75ミリメートル。内部で屈折し、開口作業時の木くずが残存しているもの）に直線状の塩化ビニール製ドレーン管等を通すため、ドレーン管を屈折している配管口になじみやすくするため、アセチレンガスバーナーを用いて1～2分間火炎をドレーン管に向けて噴射し、ドレーン管を曲げる作業を行っていたことが認められる。

(2) このような本件作業の性質、内壁の構造、作業場所の周囲の状況等に照らせば、前記バーナーの火炎が内壁や配管口内の可燃物に燃え移って火災となる危険性があったことは明らかである。

弁護人は、配管口内の木くずの存在を否定し、被告人も公判に至ってこれに沿う供述をするが、被告人の供述は捜査段階と変遷している上、その合理的な理由も説明されておらず信用しがたい。また、Cの供述によれば、穴を開けた際、その穴に残った木くずをかき出したが、曲がり角の辺りには木くずが残っていたことが窺われる上、Dの供述によれば、被告人は、前記作業中バーナーを止め、I室に赴いて作業中のDに「火がちょっと着いた、水持ってこい」「火を使っていたら穴の切粉に火が舞った」などと述べていたのであるから、配管口内に木くずが残存していたことは優に認定できるというべきである。弁護人はこれらの供述の信用性も争うが、Cの供述は、穴の屈折した形状や開けられた位置等に整合するもので十分信用できる。また、Dの供述も、Dが被告人に言われたとおりトイレからバケツで水を汲んで配管口に向けてかけているのみならず、被告人も本件倉庫の外に止めてあった車から消火器を取ってH室に戻り、配管口に向けて数秒程度消火剤を吹きかけ、バケ

ツの水をかけたDとともに、消火剤で部屋が真っ白になるまで消火作業をしているのであるから、この行動に裏付けられたDの供述も十分信用でき、弁護人の主張は採用できない。

(3) 加えて、関係各証拠によれば、被告人は、昭和49年に社団法人日本工業技術振興協会からガス溶接技能講習修了証を受けるなどしたうえ、長年空調機の修理等に従事し、その間ガスバーナーを使用する機会も少なからずあったこと、本件工事に際して他の作業員らと火気につき注意しようという話をしていたことが認められる。しかも、アセチレンガスバーナーを使用した場合、その周辺の燃えやすい物質に引火し延焼することは通常ありうることであって、被告人においてもこれを十分予見し得たことはいうまでもない。そして、アセチレンガスバーナーを使用するにあたり、防火措置として、防火シートで内壁を遮へいし、濡らした布を配管口に詰め込むなどすることは容易に実行可能であるとともに、これらの措置によりガスバーナーの火の可燃物への引火・燃焼を未然に防止し得ることも容易に理解できるところである。従って、被告人に判示のような業務上の注意義務があったことは十分肯認することができる。

3 出火場所及び出火原因について

関係証拠によれば、H室東側壁付近外壁トタンのドリルにより開けられたと考えられる穴の左右及びその上方の熱変色が著しいこと、自衛官EとDとがH室東側壁付近から煙があがっているのを見ていること、被告人が自衛官Eに火が出ていることを指摘された当時も本件倉庫H室東側壁付近のトタンが変色していたこと、H室東側壁の内部が燃焼していたこと、H室の天井の方が燃焼していたこと、本件火災直前被告人がH室内でガスバーナーを使用していたこと、そのとき、被告人が穴内側でなにか光ったのを見たこと、当時H室内に收容されている物がなかったことなどが認められ、これらの事情を総合考慮すると、H室東側壁の配管口付近が出火場所であると認められるところ、H室東側壁付近には電気配線、ガス配線がないこと、H室東側外壁トタンの金属部分に電氣的に発熱したような跡がないこと、H室内には電気器具類などはなかったこと、被告人のガスバーナー以外に当時作業していたD及び被告人が特別に出火原因となるような機材を使用していなかったこと、本件倉庫が自衛隊敷地内であり、本件火災当時本件倉庫北東角区画には自衛隊員もいなかったことが認められる。これらの事情に照らせば、電気・ガスや電気器具類などによる火災や第三者の放火・失火等を窺わせる事情は存しない。

前記のとおり、被告人は、本件火災発生直前にアセチレンガスバーナーをH室東側壁配管口付近で使用していた上、前記のようにその火が切粉に引火したことを自認する発言をして消火に努めていたのであるから、被告人自身バーナーの火が木くずなど配管口周辺の可燃物に引火したものと認識していたものと推認できる。加えて、火災鑑定の専門家といえるFも被告人のガスバーナーの火が本件火災の原因と判断できると証言しており、その推論過程等に疑問を抱かせる事情は見出せず、その判断は十分肯認することができる。

4 結論

以上検討のとおり、本件火災の出火原因は被告人のガスバーナーであり、被告人が前記のような引火防止の措置を怠ったままガスバーナーによる作業を続けたためその火がH室東側壁の配管口周辺の可燃物に引火し、本件倉庫が全焼したものと認められる。したがって、被告人に判示の業務上の注意義務違反があったものと認めることができる。

(法令の適用)

被告人の判示所為は、刑法117条の2前段(116条1項、108条)に該当するところ、所定刑中禁錮刑を選択し、その所定刑期の範囲内で被告人を禁錮2年に処し、後記情状により同法25条1項を適用してこの裁判が確定した日から3年間その刑の執行を猶予することとし、訴訟費用については、刑事訴訟法181条1項本文により全部これを被告人に負担させることとする。

(量刑の事情)

本件は、倉庫内の空調機設置工事にあたり失火により倉庫を全焼させたという事案であるが、可燃物のある室内で火気を用いる以上防火措置を講じるのは当然といえる上、被告人は、長年空調機関係の工事等に従事している業者であり、アセチレンガスバーナー等の火気取扱いの知識も十分にあったのであるから、適切な防火措置の必要性に容易に気付き得る立場にあり、かつ、本件防火措置は容易に実施可能であったのであるから、これを怠った過失は軽視できない。また、生じた火災は発生から鎮火まで約17時間もかかるほどのもので、近隣住民にも不安や恐怖感を抱か

せたとともに、高額の機器などが存在した木造平家建倉庫を全焼させているのであって結果は重大といわざるを得ない。このような事情を考えると、被告人の刑事責任は軽いとはいえないが、本件過失の内容・性質が悪質とはいえないこと、本件倉庫は既に老朽化していたこと、建物本体を除いた損害分については、海上自衛隊a航空基地隊とB株式会社との間で示談が成立していること、被告人には罰金前科1犯があるだけであること、被告人の年齢、家庭状況など、被告人のために斟酌すべき事情も認められるので、これらの事情等を総合考慮し、主文のとおり科刑してその罪責を明確にした上その刑の執行を猶予するのを相当と判断した。

(公判出席) 検 察 官 片 野 真 紀
私選弁護人 寺島秀昭, 森本哲也

(求刑一禁錮2年)

平成14年3月20日

横浜地方裁判所第4刑事部4係

裁判官 廣 瀬 健 二